

## ニュース



### 都市文化研究センターの活動内容

栄原 永遠男

#### 1) 都市文化研究センターの設立と事務局の設置

「拠点形成計画調書」(以下、「調書」)では、「6. 拠点形成の目的・必要性」の「【II】本拠点形成の目的と特色」において、

文学研究科に研究教育拠点として「都市文化研究センター」(以下「センター」)を設ける。

と述べているように、COEの研究活動を通して作り上げようとしている研究教育拠点そのものが「センター」なのである。このことは、平成14年9月18日に実施されたヒヤリングでも表明したところである(以下「ヒヤリング」)。

「センター」の組織・運営などについては、「調書」「7-1. 研究拠点形成実施計画」の「【II】研究教育チームの設定と研究の推進」の項に、

(3) 事業推進担当で構成する「センター会議」が事業の推進を全体的に統轄する。「センター会議」のもとに常任委員会、各チームの「運営委員会」、「事務局」を置く。常任委員会は拠点リーダーと副リーダーで構成する。「運営委員会」は副リーダーを中心に運営する。「事務局」に事務担当者を複数名雇用する。

と述べている。これにもとづいて、平成14年11月1日の文学研究科教授会にて、以下の平成14年10月1日付けの「都市文化研究センター規程」(以下「規程」)を制定した。「センター」の設置とこの規程は、11月11日の部局長会で承認された。

#### 都市文化研究センター規程

(設置および目的)

第1条 大阪市立大学都市文化研究センター(以下センターという)を大阪市立大学文学研究科に置く。センターは、国際学術交流を基礎としつつ、都市を文化の視点から学問的に研究し、その成果を社会に発信することを目的とする。

(事業)

第2条 センターは、前条の目的を達成するため、おおむねつぎの事業を行う。

- (1) 都市の文化にかかわる研究調査に関すること
- (2) 都市の文化に関する資料の収集と公開に関すること
- (3) サブセンターの維持運営と、そこにおける研究教育に関すること
- (4) 図書および雑誌の編集並びに刊行に関すること

(組織)

第3条 センターにつぎの所員を置く。

- 1 所長1名 副所長3名 所員
- 2 所長は、「21世紀COEプログラム」(以下COE)の拠点リーダーをもってこれにあてる。
- 3 副所長は、COE副リーダーをもってこれにあてる。
- 4 所長・副所長以外の所員は、大学教員、博士研究員、COE研究員その他をもってこれにあてる。

(職務)

第4条 所長は、文学研究科長の命を受けて、センターの業務を掌理し、所属員を指揮監督する。

- 2 副所長は、所長を補佐し、センターの業務を掌理し、所属員を指揮監督する。
- 3 副所長のうち互選により選ばれた名は、所長に事故あるとき又は所長が欠けたときは、所長の職務を行う。

(運営)

第5条 センターの適切かつ円滑な運営をはかるため、常任委員会、センター会議ならびに全体会議を置く。

- 2 常任委員会は、所長・副所長で構成し、センターの運営に関する事項を検討し、適宜センター会議に提案する。
- 3 センター会議は、事業推進担当者によって構成し、センターの運営に関する事項を決定する。
- 4 所長、常任委員会、センター会議は、センターの所員全員による全体会議を開催して、センターの運営に関する意見を聴取することができる。

(研究チーム)

第6条 センターに研究チームを置き、センターの目的にしたがって事業を推進する。

(サブセンター)

第7条 センターのサブセンターを海外に置く。

- 2 サブセンターの運営は、各サブセンターごとに設ける運営委員会が、常任委員会の指示を受けつつ行う。
- 3 サブセンター運営委員会は、大阪市立大学教員である所員若干名をもって構成する。

(ホームページ委員会)

第8条 センターにホームページ委員会を置く。

2 ホームページ委員会は、大阪市立大学教員である所員若干名で構成し、つぎの業務を行う。

- (1) センターのホームページの立ち上げと管理
- (2) COE 事業にかかわるデータベースの構築
- (3) 前項のデータベースの公開および管理
- (4) その他ホームページおよびデータベースに関すること

(文学研究科叢書編集委員会)

第9条 センターに文学研究科叢書編集委員会を置く。

2 文学研究科叢書編集委員会は、大阪市立大学教員である所員若干名で構成し、つぎの業務を行う。

- (1) 文学研究科叢書の編集および刊行
- (2) その他文学研究科叢書に関すること

(都市文化研究編集委員会)

第10条 センターに都市文化研究編集委員会を置く。

2 都市文化研究編集委員会は、大阪市立大学教員である所員若干名で構成し、つぎの業務を行う。

- (1) 学術雑誌『都市文化研究』の編集および刊行
- (2) その他『都市文化研究』に関すること

以上の「規程」により、都市文化研究センター所長には、拠点リーダーである阪口弘之が、また同副所長には、拠点副リーダーである金児暁嗣・山野正彦・栄原永遠男が就任した。ホームページ委員会の委員長は水内俊雄、文学研究科叢書編集委員会の委員長は井上浩一、都市文化研究編集委員会の委員長は仁木宏である。

以上の内容を図示すると、つぎようになる。この図は「ヒヤリング」で配布したものである。

(次ページ参照)

以上の「規程」の内容を実施していくために、COE 事務室 (119 室)、COE 会議室 (121 室) を設置した。また、常任委員会に常任委員長を置き、その下に事務局を設置した。常任委員長は栄原永遠男である。事務局には、教員 3 名 (井上浩一、三上雅子、田中一彦)、事務員 3 名が所属し、常任委員長を含めて総勢 7 名の体制を整えている。

COE 事務局は、COE 関係の各種委員会の活動、各サブセンターの活動、COE 関係室の運用その他を把握するとともに、それにとまなう諸種の事務を取り扱っている。

また、COE 事務室には、各種の情報機器類等を備え、COE 関係のさまざまな研究活動等に必要な場合、貸し出しができる体制を整えている。

## 2) 国際学術交流とサブセンターの設置

「調書」 「7-1. 研究拠点形成実施計画」の「[I] 国際学術交流の推進」に記し、「ヒヤリング」でも述べたように、「現在、文学研究科と同大学との間で「大阪市立大学プロジェクト研究」として「大阪市とハンブルク市をめぐる都市・市民・文化・大学」の共同研究を継続中である」。

そして、大学間協定を結んでいるドイツ・ハンブルク大学に加えて、文学研究科は、イギリス・ロンドン大学、ドイツ・日本文化センター「恵光」、タイ・チュラロンコン大学、インドネシア・ガジャマダ大学およびインドネシア国立芸術大学、中国・華東師範大学と、部局間の学術交流協定を結んでいる。

また、韓国・ソウル大学、台湾国立政治大学、フィリピン・スカラブリニ移民研究所、オーストラリア・ニューサウスウェールズ大学その他の研究者とも共同研究を進め、学術交流協定を結ぶ準備を進めているところである。

「調書」の同箇所では、

当面ハンブルク市・バンコク市・ジョクジャカルタ市・上海市にサブセンターの施設を確保し、センターと各サブセンター間のネットワークを形成して共同研究推進の基地とする。同種のサブセンターは、必要に応じて増設する。

としている。さらに、「調書」 「7-2. 年度別の具体的な研究拠点形成実施計画」の項で、平成 14 年度には、

- (2) ハンブルク市・バンコク市・ジョクジャカルタ市・上海市にサブセンターを設置する。
- (3) ハンブルク大学・チュラロンコン大学・ガジャマダ大学・華東師範大学等と研究者・PD・大学院生を交換して研究教育交流基盤を確立する。

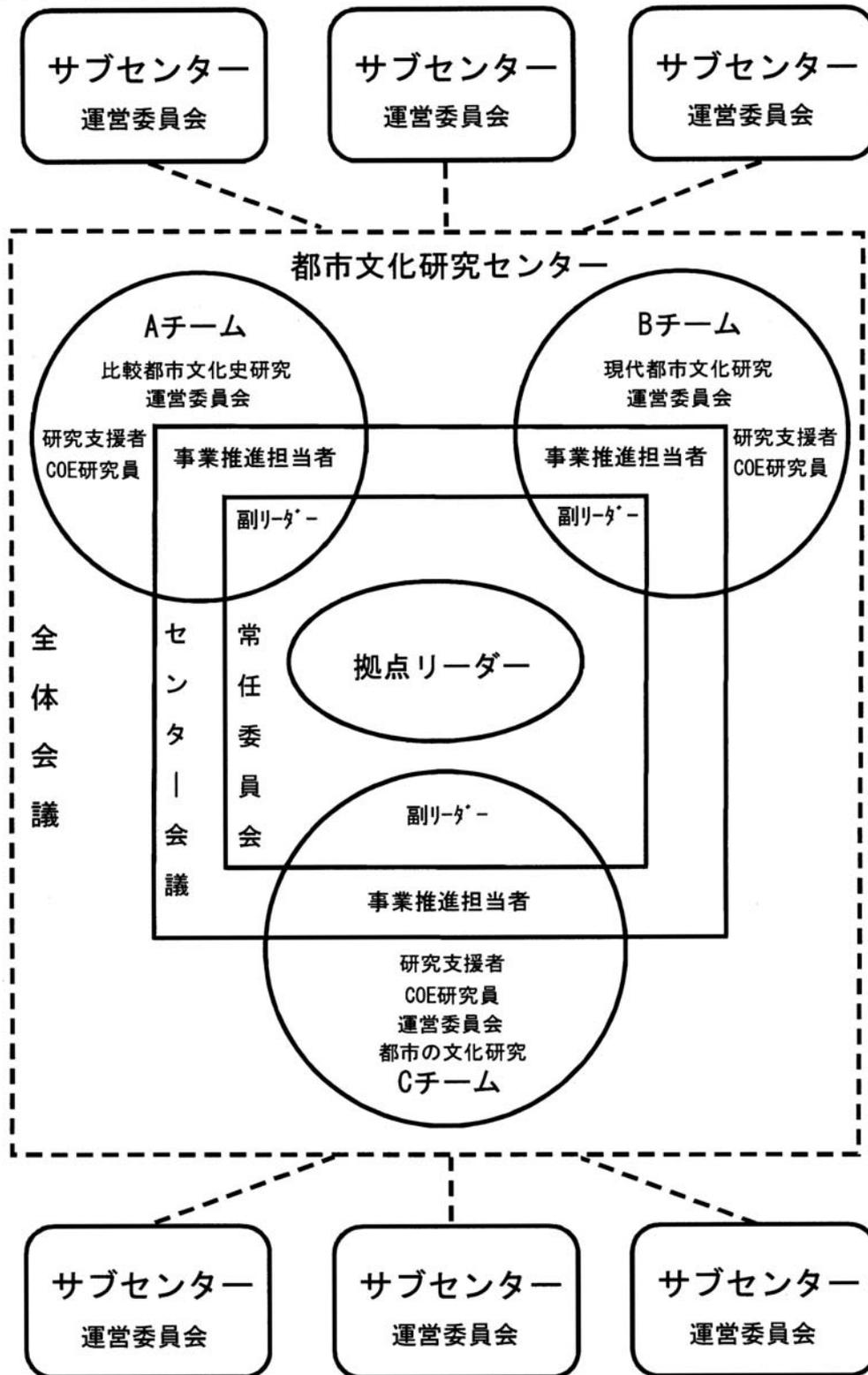
また平成 15 年度に、

- (2) 北京市、ロンドン市にサブセンターを増設する。
- (3) 中国社会科学院・ロンドン大学と研究者や PD・大学院生を交換して研究教育交流の基盤を確立する。

と計画している。

これらの「調書」の計画にしたがって、まず学術交流協定を締結した各大学と交渉を積み重ね、各サブセンターの立ち上げに全力を注いできた。その結果、ハンブルク大学、チュラロンコン大学、華東師範大学内に各 1~2 室を確保し、またロンドン市とインドネシアのジョクジャカルタ市には、民間施設と契約を結んで、それぞれサブセンターとすることができた。

[イメージ図]



各サブセンターの運営は、それぞれの運営委員会によって行われている。各運営委員会の委員長は以下の通り。この委員長が、各サブセンターの所長である。バンコク：山野正彦，ジョクジャカルタ：山野正彦，上海：榮原永遠男，ハンブルク：阪口弘之，ロンドン：阪口弘之。なお，上海サブセンターについては，山口久和・水内俊雄の2人が副所長である。

各サブセンターごとに，看板でその旨を表示し，パソコン一式，ファックス，電話，コピー機その他の必要機器を備え付け，研究・事務連絡環境を整えた。残る北京については，現在，学術交流協定を結び，サブセンターを開設すべく，交渉中である。

### 3) 研究チームの編成と運営

「調書」「7-1. 研究拠点形成実施計画」の「【II】研究教育チームの設定と運営，研究教育の推進」では，

(1) 「都市文化研究センター」に次の3つの研究教育チームを設け，学術交流協定を締結した諸大学の研究者と協力して，文化に焦点を当てて都市を研究する。各チームは，研究機能とともに教育機能を有する。

- A 比較都市文化史研究
- B 現代都市文化研究
- C 都市の人間研究

また「調書」「7-2. 年度別の具体的な研究拠点形成実施計画」の平成14年度の項では，

(1) 初年度は，ABCの3つの研究教育チームの編成，サブセンターの設置とこれに関係する大学との研究交流の基盤整備に力を注ぐ。そのために(a)～(d)を行う。

(a) 各チームに参加する研究者・大学院学生(COE研究員)を決め，「運営委員会」を設ける。

としている。これらにもとづき，「事業推進担当者」が，あらかじめ「調書」で決めていた通りに3チームに分属した。各チームの責任者はつぎの通りである。Aチーム：榮原永遠男，Bチーム：山野正彦，Cチーム：金児曉嗣。

さらに，文学研究科の助教授以下の教員を対象として，参加を募り，応募のあった中から9人に各チーム3名ずつ参加してもらった。また，各チームの研究内容と関わりが深い教員についても，適宜「事業推進協力者」として参加をお願いしている。

これらのメンバーにより，ABC3チームの運営委員会を構成し，研究・事業活動の運営にあたっている。

ABC各チームは，チームとしての研究テーマ，所属教員の専門等を考慮して，各サブセンター運営委員会と協力しつつ，その運営に責任を負うことになっている。Aチーム：北京，上海，Bチーム：バンコク，ジョクジャカルタ，上海，Cチーム：ハンブルク，ロンドン。

### 4) COE 研究員の採用

「調書」「6. 拠点形成の目的・必要性」の「【II】本拠点形成の目的と特色」において，

(6) 将来この分野の研究を担い，本拠点の研究を継続しうる若手研究者を育成する。

とうたい，また「調書」「7-1. 研究拠点形成実施計画」の「【II】研究教育チームの設定と研究の推進」の項では，

(4) 後期博士課程大学院学生を，各自の研究計画にもとづいて，COE研究員として各チームに参加させ，本拠点の将来を担う若手研究者として養成する。

と記し，「調書」「7-2. 年度別の具体的な研究拠点形成実施計画」の平成14年度の項では，前掲のように，「各チームに参加する研究者・大学院学生(COE研究員)を決め」としている。

これらにもとづき，平成14年11月1日の文学研究科教授会で，つぎの「申合せ」を承認した。

若手研究者の自発的研究活動に必要な経費に関する申合せ

(目的)

第1条 都市文化研究センター(以下センターという)に優秀な若手研究者を確保し，かつ，優れた若手研究者が自由な発想で研究活動を行うための経費(以下経費という)の使用に関して，この申合せを定める。

(応募資格)

第2条 経費支給対象者の選定(以下選定という)に応募する資格のあるものは，つぎの各号に該当するものである。

- 1 博士後期課程に在学している学生
- 2 博士課程修了者
- 3 世界的な研究拠点を形成するために必要かつ優秀なものであること
- 4 他から類似の経費の助成を受けていないもの

(選考手続)

第3条 選定に応募するものは，つぎの書類を提出しなければならない。

具体的な研究活動計画書，業績目録，履歴書

第4条 選定は，大阪市立大学教員であるセンター所員によって構成される選定委員会が案を作成し，学長が決定する。

第5条 選定人数は30名を越えることができない。

(受給条件)

第6条 経費の受給者は、以下の各号を遵守しなければならない。

- 1 センターの事業に必要な研究活動を行うこと
- 2 領収書など経費の用途、金額を証明できる書類等を提出すること

第7条 経費の支給は、単年度契約による。

ここでいう「若手研究者」とは文部科学省の用語であり、「センター」ではCOE研究員と称している。この「申合せ」にもとづいて、COE研究員を広く全国に公募した。課程博士論文・論文博士論文との関係から、各専修ごとに三～四名程度の推薦とした。各専修には、博士課程院生・ODに対する説明会を開催すること、趣旨を十分に説明することを要請した。

平成14年11月30日に締切ったところ、39名の応募があった。常任委員会、センター会議にて選考した結果、26名の採用を決定した。ついで、12月26日(木)午後4時30分から6時すぎまで、法学部棟6階第2会議室にて、辞令交付、説明会を開催した。

## 5) COE研究員に対する教育

次に、COE研究員に対する教育については、「調書」「8.教育実施計画」の「【I】教育実施計画の背景」に、

(2) 本研究科ならびに国内外の大学の優秀な後期博士課程大学院学生を、研究計画書にもとづいて、3研究教育チームのいずれかに参加させる。

と述べ、また同「【II】教育の基本方針」では、

(1) 文学研究科の後期博士課程は3つの専攻によって構成され、各専攻はいくつかの専門分野に分かれている。これまでの後期博士課程大学院学生に対する教育は、ややもすれば専門分野の枠内で行われてきた。しかし、本拠点の教育は、これにとらわれないで行う。世界から優れた研究者を招聘し、専門分野や、場合によっては専攻にまたがるゼミナールを開き、これに参加するCOE研究員の視野の拡大と研究の充実を図る。

(2) 3チームには、上記専門分野を超えて研究者が参加している。COE研究員をこれに参加させることにより、都市の文化に関する幅広い識見を身につけさせる。これによって、従来の専門分野にとらわれていたのでは得られない有効な研究視角を定めさせる。

(3) COE研究員を対象とするサマースクールを開き、国内外の優れた研究者や事業推進担当者等によ

り、フィールドワークや調査研究の方法、学会における発表方法の指導を徹底して行う。

(4) 優秀なCOE研究員には、サブセンターなどでの長期海外研修や、国際学会または3チームで行う研究会での発表の機会を与え、研究活動を活性化させる。また、本学のTA制度やRA制度を活用し、先輩の指導を通じて能力を発揮できる場を保障する。

(5) 本プログラムにより学位を取得したCOE研究員については、学長に申請して都市文化研究センターの博士研究員として採用する。これによって、業績の優れた大学院学生を経済的にも支援し、さらなる研究発展の場を保障するとともに、本拠点の将来を担う若手研究者として養成する。

(6) 研究拠点ホームページ上で、かかる諸制度を国内外にアピールし、優秀な大学院学生をCOE研究員として確保することに努める。

(7) COE研究員が本拠点に参加してあげた研究成果の内容は、ホームページにて公表するとともに、『都市文化研究』もしくは『大阪市立大学文学研究科叢書』に掲載する。

このうち(2)については、すでに実施している。COE研究員にABCチームの研究会で、順次研究発表させている。その成果の一部は、(7)のように『都市文化研究』に掲載している。

(3)については、インターナショナル・スクールの制度を実施することを、平成15年1月24日の文学研究科教授会において承認した。以下は、その際の説明文である。

インターナショナル・スクールとは、文部科学省の21世紀COEプログラムの研究拠点「都市文化研究センター」に附属する教育組織であり、文学部・文学研究科という既存の組織に加えて、国際的な教育研究を推進するために平成15年度に設置された。

受講生はCOE若手研究者(海外・国内)、留学生を優先するが、文学部・文学研究科の学生も受講することができる。

授業は主として日本語で行なわれる。外国語が用いられる場合、日本語の同時通訳もしくは説明がある。

(5)については、COE研究員で学位を取得したものは、大阪市立大学の制度整備にともなって、「博士研究員」として採用される可能性が出てきている。

## Aチームの活動内容

栄原 永遠男

Aチーム運営委員会の議事録をもとにして、Aチームの活動内容を紹介したい。

**第1回** 10月18日(金) 午前9時30分～11時  
文学部棟 234室

COE 研究員について議論した。他大学の DC の課程博士の学位を市大で出せるか、COE 研究員でない院生の課程博士論文との関係などが問題となった。

**第2回** 10月21日(月) 午前9時10分～11時  
文学部棟 234室

国際シンポジウムを開催すること、その内容は刊行物にまとめることを確認した。

Aチームで作成するデータベースについて意見交換を行った。

Aの研究会のメーリングリストを設定し、関係研究者に登録してもらって、情報を流すこととなった。

**第3回** 11月1日(金) 午前9時～10時30分  
文学部棟 234室

### 1. 研究テーマ

Aチームとしての共同研究について、意見交換を行った。

### 2. 外国からの研究者の招聘

平成14年度招聘研究者の人選について、意見交換した。

### 3. COE 研究員

今後の採用予定とスケジュールの説明。

### 4. メーリングリストの設定

今後の連絡はメールにて行うこと、内外研究者及び COE 研究員を含めた拡大メンバー向けのメーリングリストを作成することとなった。

### 5. シンポジウムの計画

Aチームは3年目に国際シンポジウム開催。予算は500万円(レセプション費用を含む)。5年目、総括シンポジウム開催。

### 6. 公立大学との関係

今回人文科学分野で COE に採択されたには市大のみなので、COE 研究員には極力公立大学の DC、OD を推薦してほしいとの要望が紹介された。

### 7. データベース

都市比較研究文献目録の作成が提案された。

### 8. 図書購入

自治体史の一括購入が提案された。

### 9. 研究者の派遣

2人、3ヶ月派遣の予定で人選する。サブセンター立ち上げと絡めて派遣すべきとの意見が出された。

### 10. 都市文化研究

毎年1冊発行。今年度も1冊発行。初年度は、今後進める都市比較文化研究の展望を現すものにすべきとの意見が出された。

### 11. 文学研究科叢書

初年度はアジア都市文化専攻設立シンポジウム関連の本を出版。出版社も確定。

### 12. フリートーキング

#### (1) サブセンター設置

Aチームは上海あるいは北京のサブセンター設置に関わることとなる。現在、華東師範大学及び大阪市の上海事務所を通じて設置場所を探しているところ、紹介がされた。

#### (2) 研究会

研究テーマは研究会を通して次第に決まっていくと思われるので、早急に研究会を組織すべきとの意見があった。

#### (3) 今後の運営形態

原則的に月曜一限、金曜一限の時間帯に会合を開く。議事録を作成する。

**第4回** 11月11日(月) 午前9時～10時50分  
文学部棟 234室

### 1. 海外派遣教員について

Aチームから2名(事業推進担当者1名、研究支援者1名)を派遣する。『都市文化研究』への論文執筆が付帯義務となる。今年度候補として、仁木、大岩本の名があげられた。

年度にまたがったの出張が可能かどうか、調査する。

### 2. 海外からの招聘研究員について

今年度中に1か月程度滞在し、研究に従事してもらう予定で人選を進めた。

それぞれ本人に可能性を打診し、結果わかり次第報告。

### 3. 公立大学の DC・OD の募集について

京都府立大、大阪府立大等、DCを持つ公立大に打診し、可能性を探る。

なお、本学の DC・OD も含め、COE 研究員は研究テーマ本位で A・B・C 各チームに配属する予定。

### 4. Aチームの研究テーマについて

メールおよび書面で提出された意見をもとに議論し、以下の点が確認された。

各個人の研究とは一旦切り離し、Aチームとして共同研究を進める。

有力テーマ・視点として、「都市空間論」「文化の担い手」が浮上。

「都市空間論」においても、「認識として

の空間」や「人間の形作るネットワーク」といった文化的側面に比重を置いた研究は可能であり、「文化の担い手」の問題とも密接に関わることから、両者は包摂可能との議論がなされた。

近世大坂を研究対象の中心に据える。

5. 『都市文化研究』について

創刊号にはAチームとして大きな研究展望をもった論文が載せられないか検討した。

第5回 11月15日(金) 午前9時~10時30分  
文学部棟 234室

1. 出張

候補者(仁木・大岩本先生)に現時点での意向、問題点を確認。Aチームとして兩名を推薦することとなった。

2. 外国人研究者の招聘

今年度は、南京大学歴史系教授で、江南の都市・商業ネットワークを専門とする范金民氏を招聘する方向でほぼ合意。センター会議で承認が得られ次第、具体的交渉に入る事となった。

招聘期間中の具体的活動内容については、(1) 近隣の先生方も招いての公開講演会、(2) 研究会・勉強会(3~4回)、(3) 自身の得意な分野について自由に話していただく講義授業、といった案が出された。その他、一ヶ月という滞在期間を活用し、大阪近辺の都市文化を見学するエクスカッション案も出された。

3. テーマについて

「都市空間論」「都市文化の担い手」の二つ以外に、人間のネットワークそのものも都市として考える立場からは、現時点でこれという案はない。しかし、今後例えば大阪という対象との接点等、テーマを見出せる余地は十分あるとの意見があった。

「文化の担い手」としての国家(領土)・宗教施設(主に寺院)・有力商人、それらの庇護を受けている知識人、伝統社会そのもの(習俗・儀礼・日常-非日常)、芸能や周縁的な存在(芸能文化の商品化等)、出版と読書(受容のありかた等)といった様々な人々・位相がからまり展開し、そこで生きた人々の空間として都市を捉える可能性について見解が提出された。

小説資料や絵画資料など、フィクション性を考慮しつつ、そこに語られ描かれる都市を考察していくことの重要性が指摘され、関連してCチーム等との連携の必然性、歴史学と文学、日中間の絵画研究等における連携の可能性についても意見が出された。

セッションのありかたは、基本的に全員参加の形をとりながらテーマのみを変えていく方式を採用し、シンポジウムの際にはセッションを明確化するのが必要であろうとの見解が出た。

4. 研究会の具体的進め方について

頻度は月一回ほどで、極力COE 研究員には発表してもらおう。

研究内容や研究会情報はホームページで広く公開すると同時に、ターゲットを絞って効率的に人を呼ぶという両面作戦をとる。

参加が望まれる研究者には早めに連絡を取る必要があるということで、候補となる研究者の名前が挙げられた。

第6回 11月22日(金) 午前9時30分~11時  
文学部棟 234室

1. 報告事項(栄原)

(1) 「都市実態調査」の計画立案に関する経過説明(谷作成の資料配付)

(2) 11月15日開催のセンター会議

① サブセンター派遣グループ決定

② 海外短期出張者決定(A:仁木, 大岩本, B:石田, 多和田, C:高梨, 大澤)

③ 土地建物貸借費用480万の内訳

④ 海外招聘研究者 A:范金民先生(南京大学), B:ブッサーン・サムロントン氏(チュラロンコン大学), C:ハンブルク大学より1名

⑤ ホームページ委員会

⑥ 叢書委員会

⑦ 雑誌委員会

2. 前回議事録確認

3. Aチームの海外短期出張者

仁木:2月24~3月24日(ハンブルク), 大岩本:1月下旬頃から?(未定)

4. 公立大学よりのCOE研究員

小林・中村から京都府立大学, 大阪府立大学, 神戸市立外国語大学との折衝状況が説明された。現在, 候補者はゼロ。今後も折衝を継続することとなった。

5. 范金民氏

井上徹を通じて早急に来日日程, 共同研究の内容などの具体的な計画について相談。こちらからの提案としては, 研究会(2度程度), 公開講演会(1度)を開催, 報告内容としては, 明清都市文化研究の現状と課題, 明清江南都市の具体的な研究, 明清都市社会の担い手といったテーマが考えられる。

6. サブセンターを通じた共同研究

華東師範大学を拠点としながらも, 上海

内外の大学、研究機関の研究者を巻き込んだ国際シンポジウムの開催について議論が行われた。

#### 7. 研究会の計画

以下は、A 研究会 ML を通じて流した案内内である。

#### 第 1 回研究会の御案内

2002 年 12 月 25 日 (水) 13:30~17:00

会場 大阪市立大学経済学部棟 2F 第 4 会議室

(JR 阪和線杉本町駅下車徒歩 10 分)

報告 塚田孝氏 (大阪市立大学大学院文学研究科・教授) 「〈社会=文化〉史の可能性」

コメント A チーム各教員より

なお、第 2 回以降の研究会では、日本史、東洋史、西洋史、国文学、中国文学をはじめ、考古学、建築史、歴史地理学、民俗学など、さまざまな分野からの報告を予定しております。

#### A チーム構成員

8. A チームの副責任者：中村先生

9. A チームのメンバー拡充

今後の会合で図っていく。

10. 国内研究者のメーリングリストへの登録

呼びかけ文を仁木が作成し、各自知り合いに呼びかけ文をメールで流し、メーリングリストに加わってもらう。以下が呼びかけ文である。

時下、益々御清栄のことと拝察いたします。

さて、大阪市立大学大学院文学研究科では、21 世紀 COE プログラム「都市文化創造のための人文科学研究」をとりすすめているところです。本プロジェクトにおいては、いくつかのチームにわかれて研究を分担していますが、私たち A チームは「比較都市文化史研究」を掲げ、主に歴史的研究からのアプローチによって課題への接近を試みております。具体的には、「都市文化の担い手」や「都市空間」を当面の柱に、新しい都市 (史) 研究の方法を模索してゆきたいと考えています。

そこで、A チームでは、学内外の方々を講師とし、シンポジウム・研究会を継続的に開催してゆくこととしました。これらの研究会は原則公開とし、学外の方にも多く参加していただき、全体として研究の実を上げたいと願っております。

この研究会などの案内は随時、ホームページ上に掲載してまいります。より確実に情報をお伝えするために、メーリングリストによる御案内もいたすことになりました。もし、皆さんがこのメーリングリストに参加いただければ、今後、確実に研究会等の案内をお届けすることができます。

どうか、皆さんには、このメーリングリストに

登録いただき、今後、私たちの研究を支えていただきたく、お願いする次第です。

本メーリングリストに参加を希望される方は、下記の A チーム構成員に宛てて、その旨、表明ください。その際、氏名、所属研究機関・役職、専攻分野、電子メールアドレスをお伝えください。よろしく申し上げます。

#### 11. 『都市文化研究』の執筆

12 月 25 日の研究会の塚田報告を中心に、メンバーのコメントを載せる。都市文化研究への展望をまとめた論攷が 1 本、COE 研究員の論文が 1 本。

#### 第 7 回 12 月 6 日 (金) 午前 9 時~10 時 30 分 文学部棟 234 室

##### 1. 海外派遣教員の渡航日程

仁木 2 月 24 日~3 月 24 日 ハンブルク中心に

大岩本 1 月 26 日~3 月 23 日 上海中心に

##### 2. 海外からの招聘研究員について

范金民氏 滞在期間 3 月 2 日~3 月 31 日 宿舎 市大ゲストハウス

井上徹より范氏の江南都市論につき、以下の 3 つの観点から紹介があった (資料配布)。(1) 江南の都市の発展、(2) 都市の三層構造、(3) 都市文化

また、平田より、范氏との研究会に関し、以下の素案が提示された。

○講演会・研究会併せて 3 回ほど実施する。

○東洋史研究者として、新宮学 (山形大学)、久保田和男 (長野高専) の両氏の参加が見込め、日程が合えば、都市についての比較研究を行う場を 1 日設定することが可能。

○日本史研究者の報告 (たとえば江戸時代の商人層に焦点をあてた研究) との組み合わせもありうる。

○都市文化との関連では、宗族の問題を取り上げることも有効か。

以上の報告・提案を承け、次のような議論がなされた。

研究会のテーマは、基本的には范氏の研究に合わせるが、今後の COE 研究の方向性との関連も考慮する必要がある。

準備の時間を考慮して、范氏の最も得意とする領域で 2 回行い、残りの 1 回で今後の研究の方向に触れてもらう、というあたりが穏当か。

范氏の江南都市論のうち、中核を成す (2) は現在の日本史者研究の関心 (都市社会史) から若干ずれるところがある。が、

その一方、中国や日本の歴史研究者が参照する欧米の理論をめぐって議論をするための足場を提供してくれるという側面もある。

范氏の江南都市論の中では(3)が最も手薄であり、今後展開の期待される領域として研究会のテーマに是非とも盛り込みたい。

范氏来日前の事前勉強会を、2003年2月17日(月)午後に行う。講師は、井上(徹)・平田。加えて、江南文化についての講義を、適任の中国学研究者に依頼する。

### 3. 海外からの招聘研究員についてII

呉松弟氏(上海復旦大学歴史地理研究所教授、専門は人口移動の研究)、2004年度以降の招聘とする(正式にはセンター会議で決定)。

### 4. 報告事項

(1) 中国社会科学院歴史研究所・辛徳勇副所長来学(11月30日)、都市文化センターとの交流について打診。歴史研究所との提携は容易であるが、他の組織も含めた交流を考える場合は調整必要。

(2) 上海サブセンターは、華東師範大学内に(12月1~3日)。2部屋を確保した。期限は1年間。共同研究で成果上げれば延長。共同研究の中身については、2003年1月に再度話し合う(その際、開所式も行う)。

## 第8回 12月25日(水)午後12時~1時30分 文学部棟234室

### 1. 「招聘研究者」

平田より、南京大学の范金民氏招聘に関連して、范氏来訪時の具体的な研究会内容〔(1)研究動向について。(2)明清時期江南地域の商人集団について。(3)『姑蘇繁華図』について〕の説明や、范氏の研究業績の紹介があった。

中村、井上徹より、范氏の来日手続きに関して、経緯や事情について説明があった。

### 2. 『都市文化研究』

『都市文化研究』掲載論文に関して、Aチームからは渡辺祥子の論文(内容について塚田より紹介あり)と塚田の第1回Aチーム研究会での報告内容を掲載することで決定。

仁木より、「論文・研究ノート」について、以下の報告・説明があった。

(1) 公募で集まった10本(Aチーム関係は無し)については、現時点では採否判断を保留、1月に完全原稿を提出してもらい、最終的に3、4本に絞る。

(2) 「招聘研究者」論文について、今回は范氏を紹介する文章を井上徹に依頼す

る。→范氏講演録を掲載することも考えられるとの提案があった。

### 3. 中国社会科学院との交流協定

中村より、中国社会科学院歴史研究所副所長・辛徳勇氏との会談内容や、中国社会科学院との具体的な交流・研究の計画案等について詳細な説明があった。これについて、次のような質問・意見が出された。

范金民・辛徳勇氏が他大学と重複する形で招聘されているケースが続くが、これは共同研究の遂行上やむを得ない人選なのか。

共同研究参加者について、Aチームが中心でもかまわないが、Aに限定はしないほうが良い。

ワークショップ、シンポジウムを開催することについては、上海・華東師範大学も強く希望している事柄であり、重要な柱として考えていく必要がある(華東師大でのシンポジウムは現代都市文化研究がメインだが、Aチームが関係してくる可能性がある)。

研究成果の公刊について、華東師大でも論文集を出す予定であり、それには市大文学研究科叢書のラウンドナンバーを入れることで合意している。その辺りの事情を中国社会科学院のほうにも伝える必要がある。

論文集は中国語に翻訳して中国で出すことが、日本の研究状況を紹介するという点でも、望ましい。

研究集会について、復旦大学の呉松弟氏紹介の研究者と協力してミニシンポジウム等をやっても考えられるが、その場合華東師大の意向をくみとることも重要である。

中国社会科学院との協定それ自体は、今後柱となっていくであろうことは容易にイメージできる。しかし都市文化研究センター全体としてどういう総合的なものになるのか。個別対応に迫られて、全体として研究はどのように蓄積されていくのか、よく意識しておく必要がある。

### 4. 研究会の進め方

回ごとに主たる担当を決め、報告者などを用意していく分業方式が、準備に早く動けるというメリットもあり、現実的。

分業方式でも、全体で長期計画を調整することが必要である。→長期計画・担当者も含めて、次回2月17日に話し合う。

メーリングリストをもっと活用して意見を出すべき。(メーリングリストは幅広く登録者の拡大が必要。ただ、実際にどういう研究会運営をするのかなど、もう少し具体性を打ち出さないと呼びかけにくい。)

同日の午後 13:00 より事前勉強会を開く。  
於 法学部棟 6F 第二会議室

5月14日(水) 9:30~  
報告: COE 研究員 2名を予定

**第9回** 1月24日(金) 教授会終了後  
文学部棟 234室

1. 范金民氏の研究会

平田より、范氏の研究会日程の提案があり、以下の通りの方向となった。会場、通訳等については平田の方で手配。

(1) 3月17日頃

報告内容: 「明・清時代の都市文化研究の動向について」(仮題)

コメンテーター: 久保田和男氏(長野高専), 宋代都市研究の立場から

(2) 3月22日頃

報告題目: 「明・清時代江南地域の文化の担い手としての商人集団について」(仮題)

コメンテーター: 新宮学氏(山形大学), 明清北京研究の立場より \*できれば日本史研究者よりのコメント

(3) 3月26日頃(未定)

講演会題目 『姑蘇繁華図』について(仮題) ※できれば日本の中世・近世都市図の研究者よりのコメント

2. 今後の計画

塚田より、大阪を中心とした都市研究プランが提示された(資料配付)。このプランを手掛かりに議論が行われ、同時に事業計画書、図書購入希望などについて話し合われた。

(1) 事業計画書

范金民先生の研究会(平田)、今後の研究会計画(井上(浩)), 文献目録(仁木), 資料調査(塚田), 北京での共同研究(中村)といった形で1月31日締め切りで計画書を作成することとなった。

(2) 図書購入

自治体史(仁木), 都市事典・都市史事典(井上(浩)), 都市地図・北京の都市関係の档案史料(井上(徹))の図書購入希望の書類を作成することとなった。

(3) 4月以降の研究会

4月(別途、仁木より関係者にメール配送済み)

(4) 今後の研究会の運営

平田が会場の確保、案内の送付を担当することとなった。

辛徳勇(中国社会科学院歴史研究所)氏を招聘 3月7日から3月23日まで

**「都市文化創造のための人文科学的研究」Bチーム活動報告**

山野 正彦

1 活動の目的

Bチームの研究テーマは広く現代都市文化にかかわる諸問題である。歴史の研究や人間それ自体の研究と並んで、現代の日常生活世界における人間の文化的営み、現実社会や文化の中での人間生活の具体的な姿を解明することを目ざしている。多文化共生と都市的生活様式をキーワードとした人文科学の多分野にまたがる研究主題を追求するために、社会学、地理学、文化人類学などの具体的研究で基本的な手法として用いられる野外調査法に基づく実態調査を中心としている。本チームでは、上海、バンコク、ジョクジャカルタに設置したサブセンターを拠点としたアジアの都市での野外調査を主体に、韓国や台湾、フィリピンなどでの標本調査などを展開して、これまで蓄積のある大阪とその周辺地域の都市社会、都市環境の研究などの成果と合わせ、現代の都市の姿を明らかにした上で、今後の都市文化創造のための提言を含んだ実践的な知見を発信することを目標としている。このような課題の遂行のために、華東師範大学(上海)、チュラロンコン大学(バンコク)、ガジャマダ大学、インドネシア国立芸術大学(ジョクジャカルタ)など本学と学術交流協定を結んだ大学との共同調査研究を推進することは本チームの重要な任務である。またこのCOE研究の大きな目的は研究拠点の形成であるから、内外の若手研究者の育成、共同研究グループの形成、拠点からの情報発信と情報ネットワークの形成等も本チームの活動の最重要な課題として位置づけられている。

2 これまでの活動

Bチームは森田洋司(社会学)、谷富夫(社会学)、豊田ひさき(教育学)、山野正彦(地理学)、水内俊雄(地理学)、中川眞(アジア都市文化学)、橋爪紳也(アジア都市文化学)を主軸にして、石田

日時: 2003年4月12日(土) 午後

会場: 大阪市立大学

テーマ: 書評; 伊藤毅氏著『都市の空間史』(吉川弘文館, 2003年2月刊)

報告: 塚田孝氏(大阪市立大学大学院文学研究科) 仁木宏氏(同上) ※著者の伊藤毅氏も参加。

佐恵子（社会学），湯川良三（心理学），木原俊行（教育学），多和田裕司（アジア都市文化学）を加えた11名の教員と，岸政彦（社会学），二階堂裕子（社会学），松永寛明（社会学），河野由美（心理学），西美江（教育学），西部均（地理学），神田孝治（地理学），原口剛（地理学），鈴木康予（中国語中国文学），垣田裕介（社会学・大阪府立大学所属）の10名のCOE研究員から構成されている。2002年10月20日のML始動から実質的活動を開始し，これまで（2003年2月末まで）に8回の運営委員会，研究会を開催し，活動計画の策定や招聘研究者を囲んでの討議などを行ってきた。

平成14年度の活動は，とりあえず下記の3グループ別の計画立案を進めることから始められた。

- (1) 上海プロジェクト（森田，豊田，水内，木原），現代都市の社会問題，再開発問題等。
- (2) バンコクプロジェクト（山野，中川，橋爪，多和田），都市文化の感性，文化と身体論等。
- (3) ジョクジャカルタプロジェクト（山野，中川，石田），都市文化と政治，文化と情報論等。

このほか谷による多文化共生に関する都市実態調査プロジェクトが開始された。これは他のグループともタイアップして，外国人労働力移動やエスニック・リレイションなどに関する市民意識調査を行おうとするものである。

本チームの研究成果は『文学研究科叢書』や『都市文化研究』などの媒体を通じて公にされるほか，上海，バンコク，ジョクジャカルタなどの拠点都市で開催する学術フォーラム（シンポジウム）やワークショップなどで発表され，英語，中国語等の報告書として公刊されることを原則とする予定である。平成15年1月14日には華東師範大学で上海ラウンドテーブルが開催され，Cチームの金児の報告とともに，水内が「大阪における貧困・差別と都市政策の歴史的展開」と題した報告を行った。3月12日には第2弾として，華東師範大学UCRC上海サブセンターにて，教育居住環境調査研究に関するラウンドテーブルが開催され，木原の「日本における情報コミュニケーション（ICT）教育の動向と課題」，豊田の「授業研究による教師の力量形成——実践的方法」の2つの発表が行われる。また3月29日にはジョクジャカルタ市内において「What is happening in the media?」というテーマで学術フォーラムが開催される。インドネシア側4名やAチーム榮原の発表のほか，中川，石田，そしてBチームがゲスト発表を依頼した福田珠己（大阪府立大学助教授・14年度本学文学部非常勤講師）の発表が予定されている。なおこのフォーラムの報告書は15年度に英語で刊行されることになっている。

チュラロンコン大学との学術交流協定締結は中川の精力的な活躍によって準備されたといっても

過言ではないが，タイ側の窓口となったチュラロンコン大学芸術学部副学部長ブッサコーン・サムロント博士の尽力も言い落とすことができない。同氏は平成15年2月15日から3月7日にかけてCOE招聘研究者（大阪市立大学客員助教授）として来学された。滞在期間中2月19日にはBチーム研究会で，3月4日には公開講演会で，専門分野のタイ音楽学と音楽療法について興味深い研究成果を話された。とくに「The use of Thai musical instruments as a tool in Music therapy following Akaboshi's Musical therapy method」というタイトルの講演は，日本人の研究者から多大な刺激を受けた，アジアの音楽を用いた障害者のための音楽療法の研究というユニークなものであり，タイ音楽についての理解を得た以上に，文化研究の社会への応用という面で大きな示唆を与えるものであった。

今年度は事業の急速な立ち上げのために，各事業推進担当者とも教育研究の日程をやりくりして，海外での活動を精力的にこなした。その際に森田の華東師範大学現代都市社会研究センター，中川とチュラロンコン大学，ガジャマダ大学，インドネシア国立芸術大学とのつながりをはじめとして，各教員の培ってきたこれまでの協力体制が大きな効果を発揮し，文学研究科と学術交流協定を結んだ大学の関係教員の方々の熱烈な応援を得られたことは特筆しておかねばならない。Bチームの関係する上海，バンコク，ジョクジャカルタのサブセンターの開設が短期間のうちに順調に行われ得たのはこのような背景があってこそであった。サブセンターの開設・整備と平成15年度からの本格的な活動に備えた事前調査のために，平成14年度末までに海外出張したBチーム所属教員は下記のとおりである。

谷富夫	平成14年12月1日～12月2日 上海
森田洋司	平成14年12月1日～12月3日 上海
中川眞	平成14年12月5日～12月19日 バンコク，ジョクジャカルタ
山野正彦	平成14年12月7日～12月19日 バンコク，ジョクジャカルタ
中川眞	平成15年1月8日～1月17日 バンコク，ジョクジャカルタ
橋爪紳也	平成15年1月10日～1月12日 バンコク
谷富夫	平成15年1月13日～1月17日 ジョクジャカルタ
森田洋司	平成15年1月12日～1月13日 上海
水内俊雄	平成15年1月13日～1月15日 上海
石田佐恵子	平成15年1月19日～3月11日

	ジョクジャカルタ, オーストラリア
多和田裕司	平成 15 年 1 月 22 日~3 月 29 日 バンコク, マレーシア
谷富夫	平成 15 年 2 月 16 日~2 月 18 日 台湾
谷富夫	平成 15 年 3 月 2 日~3 月 4 日 大韓民国
山野正彦	平成 15 年 3 月 10 日~3 月 15 日 バンコク
森田洋司	平成 15 年 3 月 11 日~3 月 18 日 上海
豊田ひさき	平成 15 年 3 月 11 日~3 月 16 日 上海
木原俊行	平成 15 年 3 月 11 日~3 月 14 日 上海
水内俊雄	平成 15 年 3 月 11 日~3 月 14 日 上海
中川眞	平成 15 年 3 月 26 日~3 月 31 日 ジョクジャカルタ
石田佐恵子	平成 15 年 3 月 27 日~3 月 31 日 ジョクジャカルタ

### 3 平成 15 年度活動計画

B チームの研究活動はサブセンターのおかれた都市にある大学の協力の下に実施される都市での実態調査を主軸としたプロジェクト方式を中心に据えている。平成 15 年度は今のところ、以下の 4 つの調査研究プロジェクトが計画されている(カッコ内は中心となる事業推進担当者)。

(1)「上海市における都市再開発地区再定住評価調査」(森田, 水内)

新移民や都市再開発地区のコミュニティ変貌に関する調査。再開発に伴う再定住プログラムの評価のために住民からの聞き取り調査を実施する。華東師範大学の陳映芳氏等との共同調査研究で、上海サブセンターの根幹をなす事業と位置づけている。成果は刊行されるほか、WEB 上で公開される予定である。

(2)「上海市における類型別市街地居住教育環境の評価調査」(豊田, 森田, 水内)

変貌著しい上海市の市街地区から小学校の校区をもとにサンプル地区を選定し、土地利用の変化を調査し居住環境の変化の実態と教育施設の状況の評価を行う。COE 研究員が同行する。地図を含む調査成果は公刊されるほか、WEB 上で公開される予定である。

(3)「都市環境モノグラフーソフトシティの基盤的研究のための実態調査」(山野, 中川, 橋爪)

都市環境モノグラフの作成のため、バンコク、ジョクジャカルタなどの都市内の地区を選定し、サウンドスケープ、ストリートデザイン、場所の記憶などについての調査を行

う。文化を生み出す基盤となっている都市環境の基礎データを蓄積して、センス、身体、芸術と景観や環境との関連を探り、アジアのソフトシティの構想を得ることを目的とする。

研究成果はシンポジウム等で報告し、論文やデータベース、展示等多様な媒体を通じて公表する。現地大学の協力のもとに行われる。あわせて中川を中心にして、将来を見据えた日本、タイ、インドネシアの 3 国の大学による共同研究の可能性について検討する。

(4)「多文化共生に関する都市実態調査」(谷)

国際労働力移動、グローバル化、民族間関係に関する市民意識についてのアンケート調査を、台北、ソウルで実施する。台湾国立政治大学およびソウル大学の研究者との共同研究である。COE 研究員が同行する。

次にサブセンターでの研究集会は次のような計画である。バンコクではチュラロンコン大学芸術学部との共催で、平成 15 年 4 月 8 日に「What is happening on the street?」というテーマで国際フォーラムを開催する。三浦國雄の他、B チームの中川、水内が報告する。平成 16 年 3 月にも第 2 回フォーラムを開催する予定である。ジョクジャカルタでは平成 15 年 12 月もしくは 16 年 1 月に、ガジャマダ大学人文学部、インドネシア国立芸術大学との共催で、第 2 回フォーラムを開催する予定である。これらのシンポジウムの内容についてはそれぞれ現地で英文報告書を出版する計画である。上海で行われるプロジェクトに関するラウンドテーブルも随時開催される予定である。

このほかチュラロンコン大学、ガジャマダ大学から優れた研究者各 1 名および外国人 COE 研究員各 1 名を招聘する計画であるほか、平成 15 年 6 月にはインドネシア国立芸術大学のバンデン学長が来学される予定である。日本側の COE 研究員も神田がジョクジャカルタに、河野がバンコクに滞在調査する予定である。

## 「都市の人間」(C) チーム

金児 曉嗣

本研究教育チームは、人文科学のうち歴史学を除いた哲学、心理学、文学、言語学などの学問領域を研究する教員・大学院学生から構成され、人間の思想・宗教・文学、芸術・芸能などを題材として、過去・現在の都市に生きる人間の営みを広く研究することを目的としている。具体的には、大阪をはじめ西欧・アジアの諸都市を対象として、

都市開発による生活環境の変化によって生じた新旧の価値観や生活様式の対立・多様化、都市生活と芸術文化との関係、都市住民の精神生活などを、文献学や実態調査あるいは比較文化的手法を用いて研究する。

本チームの構成員が属する専修は、哲学、心理学、教育学、国語国文学、中国語中国文学、英語英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、言語情報学、表現文化学、アジア都市文化学と多岐にわたっている。このような専攻を異にする多角的な観点から、特定のテーマについて研究と教育を推進する試みはかつてなかったであろう。

われわれの運営委員会は、かかる多様な学問領域がいかにして共通のテーマへと収斂したうえで体系的な成果をあげうるか、という問題から議論を開始した。以下に6度にわたる会合の議事概要、ならびに研究会の記録を示す。

## 運営委員会議事録

### 第1回 運営委員会

日時：2002年10月23日 9:30 - 10:45

場所：文学研究科長室

出席者：金児、阪口、山口、高梨（以下人名は敬称略）

議事録作成：高梨

<概要説明>（本拠点副リーダーの金児から）

#### 1. Cチームの構成

金児（リーダー）、阪口（兼拠点リーダー）、小林（道）、山口、三浦、芝原、田畑、金光、高梨（以上9名）

この研究チームは、過去と現在を含む、都市に生きる人間の思想、宗教、文学、芸術、芸能等についての研究に従事するものである。Aチーム、Bチームと異なり、共通の問題がすぐに立てられるわけではない。そこで、運営委員会を重ねる過程で共通テーマを模索していくことにしたい。できるだけ民主的な運営を行いたい。

教授会でアナウンスがあったように、若手の助教教授にも志願を募り、人選を経てチームに加わってもらうことになっているが、HPの立ち上げ、サブセンターの設置、COE研究員（大学院学生）の参加と育成、研究誌の発行など、個々人の研究以外の雑務も多い。そこで常任委員会ですでに適当な人選をして、各チーム3名の若手に加わってもらうことになっている。

2. 今後の課題（なお項目順は重要度順をあらわすものではない）。

(1) 本チームの固有の課題として、さしあたりハンブルク大のサブセンターを設置すること。なお、ロンドン大およびデュッセルドルフ

の「恵光」にサブセンターを設置するのは来年度の課題。

(2) 国内外の研究者を招聘してゼミナールやシンポジウムを開催する。当座はロンドン大、恵光との関係で開催することになるが、いずれにせよ、研究者招聘の問題に関しては、他のチームを含む全体で進めるべき問題である。

(3) 各委員の個別研究（研究の「準備」でも構わない）も進める。ただし、共同研究の中身については、会合の中で民主的に議論して決めるべきである。

(4) 研究チームに関するHPの立ち上げ。これは一般への広報と、内部向けデータベースの構築を目的とする。ただしデータベースをどのような形にするかについては今後の議論をまたねばならない。

(5) 叢書の創刊。ただし第1巻は先日のアジア都市文化学のシンポジウムの成果を掲載するので、火急の問題というわけではない。

\*なお、経費の使い方に関しては、運営委員会での承認を経、さらに常任会議、センター会議での決定をまって運用されることになる。

## <フリートーカー>

### 1. 個人研究の内容について

金児：都市化に伴う人間の心理、人間観、価値観、生と死についての意識の変遷に関して、過去の文献に当たりつつ研究を進める。

山口：18、19世紀の、主として中国の前近代的都市における知識人について、またどんな学問がどういう形で出てきたかについて研究する。

阪口：日独、および日英間の共同研究の形で、ヨーロッパにある日本の絵画資料のデータベースを作成し、その成果を、大英博物館や早稲田大学の演劇資料館での展覧会を開催して公表する。とくにハンブルク大周辺の博物館には未整理の日本ものが収蔵されており、これらについて日独合同で調査を行いたい。

高梨：都市の市民生活と芸術の間の相互限定的関係を、感性的芸術経験の事実性と、その背後に想定される共通感覚の超越論的地平を切り口にして、現象学的美的価値論やアドルノ、ハバマスらの社会哲学を参照しながら、考察したい。具体的な考察対象は主に日本の都市とし、フィールドワークも取り入れる予定。

### 2. 差し迫った課題

ハンブルク大のサブセンター設置が急務である。金児を責任者、田畑もしくは高梨を実務者として、11月中にハンブルク大への設置交渉のための出張を入れる必要がある。具体的には同大の日本学研究室の一室を借り、扉に看板を掛けてもらうことなどを交渉する。ただしサブセンターにそもそも何を期待するかを詰めることが先決問題。なお、同大のシュナイダー教授にはあらかじめ書面で依

頼をしておく。

### 3. 今後の運営形態

・原則的に水曜日の午前9時半から1時間程度の会合を開く。

・議事録の作成…田畑, 金光, 高梨の間で適宜交替して担当する。

・MLを立ち上げて、会合の連絡、議事録の配布、委員間のやりとりの、他の委員との共有を、MLを通して行う。(ML名は“COE-Human”とする)

### 4. 次回の運営委員会で話し合われるべき中心議題

拠点に設置するサブセンターに、そもそも何を期待するべきか。この問題は設置交渉に直接関わるので、急いで詰める必要がある。

以上

## 第2回 運営委員会

日時：2002年11月1日 研究科教授会終了後

場所：法学部研究棟11階大会議室

出席者：金児, 阪口, 山口, 小林, 芝原, 田畑, 金光, 高梨 (以下人名は敬称略)

議事録作成：高梨

### 1. 前回欠席の運営委員の個人研究内容の概要

小林：都市と人間に関する哲学的研究、もしくは、パリの哲学者について。

芝原：「黒澤明の『羅生門』と東西都市文化の相互作用」

文楽および歌舞伎につながるものとして20世紀都市文化の産物とも言えるトーキー映画を位置づけ、事例研究として、映画『羅生門』の創造とその古典化を東西都市文化の相互作用という観点から論じる。

映画『羅生門』に組み入れられた芥川の「藪の中」は、『今昔物語』中の説話以外に、少なくとも、Browningの大作The Ring and the Book [1万行を超える叙事詩]とBierceの短編“The Moonlit Road”を種本として使っている。映画『羅生門』を選んだのは、このような作品を通してロンドン大学の研究者との交流があるいは実現するかもしれないと考えたからである。ただし、交流が実現しなくても、それなりの進め方はあるかと考える。

田畑：都市文化の精髓としてのオペラないし音楽劇が都市において果たしてきた文化的機能、および、逆に都市文化がオペラないし音楽劇にどう反映されているかについて明らかにし、あわせて日本の文楽などの音楽劇とヨーロッパのそれとの比較研究を行う。

金光：王朝物語・室町物語の類が、近世の都市文化・出版文化の中で、いかに享受され、変容を遂げながら近現代まで伝えられたかという問題についての研究。国内及びヨーロッパ諸国に所蔵される関連資料を調査収集する。

### 2. サブセンターの設置と出張

・サブセンター設置のための短期の出張には、できるだけ多くのメンバーが出張して、顔を出しておいた方がよい。全員が出張する必要はないが、全員にその義務があると考えて、責任者の金児、阪口の都合のよい日を選んで検討することにする。

・十分な下交渉が必要である。

### 3. 後期博士課程大学院学生 (COE 研究員) の推薦

COE研究員に相応しい、都市と文化に関わるテーマについて研究している後期博士課程大学院学生 (以下、院生と略す) を各専修ごとに3~4名推薦すること。

### 4. 会合日程について

以上

## 第3回 運営委員会

日時：2002年11月8日 10:00 - 11:30

場所：研究科長室

出席者：金児, 阪口, 三浦, 山口, 芝原, 田畑, 金光, 高梨 (以下、人名は敬称略)

議事録作成：高梨

### 1. 会合日程について

(「運営委員11, 12月予定伺い表」によると) 全員が集まることのできる日は設定できそうもないことが判明。欠員が出ることは致し方ない点、了承願いたい。

### 2. 個人研究計画について

ML上で依頼したとおり、助教授クラスだけでなく、事業推進担当者も個人研究計画の詳細を提出されたい (ただし既に計画書を提出された芝原先生は除く)。

金児：「都市生活の心の問題と心理アセスメント」。配布資料あり<sup>1)</sup>。

阪口：「上方の都市文化に関する大英博物館等での展覧会 (2005年度) 開催のための資料整理」(ただし、Cチームの領域を逸脱する、全体構想に組み込むべき内容でもあることを了解頂きたい)。配布資料あり<sup>2)</sup>。

### 3. チームの研究のすすめかたについて

Aチームは、都市文化の担い手、都市の空間認識などについて、歴史・文学などの関連分野から多角的に研究する。

Bチームは多士済々だが、文化人類学的志向性という点で一応のまとまりがある。

Cチームは都市というキーワードのみが共通項である。とはいえ、もしCチームでなにか共通性のあるテーマを設定し、共通の理念のもとに研究することができるなら、それに越したことはない。そこで、各運営委員から提出された上記2の「研究計画書」に基づいて、近々に共通テーマの設定について全員で検討したい。

・質疑応答の内容

以上

個人研究と共同研究の二本立てということではない。しかし個々人のテーマが都市の問題という点で触れ合うところがあるなら、共通テーマを掲げた方がよい。共通の研究から漏れる個人研究は個人として成果を出す。

なお、COEには院生を育成するという側面もある、院生（COE 研究員）を含む共同チームを組んで、研究を推進する必要もある。

叢書を年1冊出すことも考えて、共通テーマの設定が重視される。そこから漏れる個人研究については、『都市文化研究』誌に掲載すればよい。

#### 4. COE 研究員について

各専修から3~4名の“COE 研究員”を推薦してもらおう。院生への説明は専修ごとに行ってもらおうが、その際の基準となる「募集要項」を常任委で作成したので、参照されたい（配付資料あり<sup>3)</sup>）。締め切りは11月22日。応募者多数の場合は常任委員会で選考する。ただしそれに先立ってCチーム内であらかじめ検討し、順位づけておく必要がある。

上記の件に関して活発な質疑応答がなされた。

#### 5. サブセンター設置のための出張・交渉について

これまで出た計画をまとめて大枠と出張時期を拠点副リーダー（金児）が決める。なお、Cチームとしてはロンドン、恵光、ハンブルクに関して主体的に決めていけばよいが、上海、他東アジアについてはA、Bチームと連携して計画をたてる必要がある。

サブセンター設置のための出張については、ロンドンチーム、ドイツチームに分ける必要がある。またそれとは別に、数人が年度内に3ヶ月の長期出張に出る必要がある。

先方とはこの（短期）出張で今後の共同研究計画を立てなければならない。出張については、教授会事項の中でも優先されるよう、便宜を図ってもらいたい。

ロンドンとハンブルク、恵光のサブセンター設置に関しては事前の根回しが必要であるが、ハンブルクと恵光は阪口、金児が、ロンドンは金光が、それぞれ担当する。

#### 6. その他

##### ・質疑応答

共通の研究テーマや予算執行について議論がなされた。

・サブセンター設置のための短期出張についての暫定案（金児）

ドイツ組（金児、阪口、松村）：11月26日に出発、12月1日帰国。

ロンドン組（芝原、高梨、金光）：ドイツ組に先立って出発、27日にドイツでドイツ組と合流、12月1日帰国。

・次回会合予定：11月15日（金）10:00 研究科長室

#### 第4回 運営委員会

日時：2002年11月15日 10:00 - 11:00

場所：研究科長室

出席者：金児、阪口、芝原、山口、田畑、金光、高梨（以下、人名は文脈により敬称略）

議事録作成：高梨

＜進行：阪口（金児急用で遅れたため）＞

##### 1. 栄原からの資料についての説明

・Cチームとサブセンターの関係はさらに追求されねばならない。

・ハンブルクとの関係は、ある意味ではこれまでに道ができてきているという面もある。

・ロンドン大における上方役者絵に関する共同研究は、大英博物館、早稲田の博物館、大阪市立博物館にいずれ成果を出す。この点もすでにある程度の道がついている。

・ただし、ロンドン、ハンブルクとの共同研究以外はCチームの場合、全く白紙である。

上記の点に関して拠点副リーダー（金児）から、以下の説明あり。

A、B両チームの議論内容の経過については金児と阪口にはMLでみられるようになっているが、それ以外のメンバーには周知されていない。しかし全員が把握しておいた方がよいと思われるので、目を通していただきたい。（配付資料<sup>4)</sup>あり）

##### 3. 出張について

A) 23日にロンドンに向けて出発：芝原・金光・高梨

・24日ないし25日 ロンドン大

—サブセンターの設置交渉。

—日本語研修の学生受け入れについて相談。

先方の意向を確認する。また、先方の学生2名程度を受け入れる可能性についてこちらであらかじめ確認する必要あり。

（金光—ガーストル教授間のメールでのやりとりによると、先方は3回生の受け入れを希望しているが、こちらとしては院生なら受け入れ可能か？）

—共同研究の可能性について打診。

既定の「上方役者絵に関する研究」以外の共同研究の可能性について、芝原先生を中心に。

—大学間協定への展開可能性について打診。

（背景に学長の要望あり。ただしそれはCOEとは直接関係はない）。

・26日にデュッセルドルフへ移動。

B) 26日にデュッセルドルフに向けて出発：金児・阪口・松村。

26日 金児・阪口・松村がデュッセルドルフで芝原・金光・高梨組と合流。

27日 デュッセルドルフ「恵光」日本文化研究

センター  
 ーサブセンターの設置交渉。  
 ー共同研究の可能性の打診。  
 ーハンブルクへ移動。

28日 ハンブルク大学  
 ーサブセンターの設置交渉。  
 ー共同研究の可能性の打診。  
 ー先方の研究者を市大に招請する可能性について打診。  
 ーベルリンへ移動（鉄道）。

30日 帰国の途へ。12月1日 帰国。

#### 4. その他

旅行者への予約依頼、COE 研究員の推薦、次回の会合について連絡。

以上

### 第5回 運営委員会

日時：2002年12月3日 18:00 - 19:45

場所：研究科長室

出席者：金児、阪口、芝原、山口、小林（途中退席）、田畑、金光、高梨

議事録作成：高梨

#### 1. COE 研究員の選考について

正規の選考委員会審議に先だって、C チーム「都市の人間研究」に関わる選考の予備的な順位付けが行われ、活発な議論が展開された。おおむね、以下の3つの基準が提示された。

- (1) 「心」という共通テーマ
- (2) 個人研究として優れたもの
- (3) D 論文への近さ

#### 2. 研究会について

さしあたり、金児から自己紹介を兼ねて報告する。

#### 3. サブセンター関係の報告

・芝原よりロンドン大学、金児より恵光とハンブルク大学でのサブセンター設置交渉に関する簡単な報告<sup>5)</sup>あり。

・ロンドンの場合、ロンドン大内部にサブセンターのための部屋を融通してもらうことが難しいため、一般のマンションなどの物件を1年契約で賃貸することになる見通し。ところで、金光が3月に行くまでの間、今年度中にロンドンに在駐する人はまだ決まっていない。なお、この人は『都市文化研究』に成果を報告する義務がある。

#### 4. その他

次回会合日程は未定。

以上

### 第6回 運営委員会

日時：2003年1月24日 研究科教授会終了後

場所：非常勤講師控室

出席者：金児、阪口、三浦、山口、小林、芝原、大澤、杉井、田畑、金光（以下、人名は敬称略）

※大澤・杉井は研究支援者として今回より参加  
 議事録作成：金光

#### 1. 「研究事業計画書」と「図書購入計画書」について

・申請できるのは事業推進担当者だが、それ以外のメンバーについても計画があれば、金児までメールで届けること。金児・阪口の間で調整して、組み込めるものは組み込む。

・事業推進担当者は31日までに提出し、コピーを1部金児のBOXに入れておく。

・14年度はもうほとんど期間がないので、15年度研究事業の予備調査のようなものでもかまわない。

・COE 研究員や海外の研究者を共同研究者とする場合、その分の経費も挙げておくこと。

#### 2. インターナショナル・スクールについて

山口) 五十周年記念事業の資金が見込みどおり集まらないかもしれない。インターナショナル・スクールが来年度だけでなくそれ以後も継続する企画であるのなら、講師の旅費・滞在費・謝礼などをCOEの方から出せないか。来年度の講師はヨーロッパから招待するので、C チームから申請してよいか。

金児) 事業計画の中に何らかの形で盛り込んで、常任委員会で検討する。

#### 3. サブセンターについて

・ロンドン・ハンブルクのサブセンターは、C チーム主体で運営されることを確認。

・整備状況

ロンドン大学は2月1日に杉井が出発して整備に着手する。研究室と宿舎を兼ねるため、少なくとも2室が必要である。ハンブルク大学については、高梨が整備中。2月からは大澤・仁木先生が滞在。

・共同研究・シンポジウム

ロンドン大学では阪口が4月半ばにシンポジウムを予定、芝原がDodd 教授の「都市と文学」プロジェクトに絡めるような形を考える。ハンブルク大学について、平成15年度の早いうちに開所式+ラウンドテーブル形式のものを行う。

#### 4. その他

C チームと他の2チームの間関係について議論がなされた。

以上

### 研究活動

本研究教育チームでは、すべての構成員が「都市の人間」という1つのテーマに貢献しうる可能性を確認する意味で、このテーマに関連する研究報告を行ってもらうことから始めることにした。

以下にこれまでの5回にわたる研究会の報告者・題目等を示す。

#### 第1回研究会

日時：12月13日（金）午後4時半～6時半

場所：711C（法学部棟11階）

報告者・題目

金児曉嗣（本研究科教員，心理学専修）「映画『男はつらいよ』はなぜ日本人を魅了したか—宗教心と望郷の念がもつ癒しの効果—」

#### 第2回研究会

日時：12月24日（火）午後6時～午後7時30分

場所：711A（法学部棟11階）

報告者・題目

芝原宏治（本研究科教員，言語情報学専修）「映画『羅生門』はなぜ西洋に受け入れられたか—黒澤が示した「ふるさと」への帰路—」

#### 第3回研究会

日時：1月17日（金）午後5時～8時

場所：711A（法学部棟11階）

報告者・題目：

1. 王 標（COE 研究員，中国語中国文学専修）  
「随園を訪ねてきた人々—袁枚の交遊ネットワーク—」
2. 向井有里子（心理・D）  
「異文化の受容と拒絶—恐怖管理理論の観点から—」
3. 河野由美（心理・D）・渡辺美穂子（同・D）・金児曉嗣（教員）  
「都市の大学生の宗教観と脳死・臓器移植への態度に関する計量的研究」

#### 第4回研究会

日時：2月5日（水）午後1時半～6時

場所：711C（法学部棟11階）

報告者・題目：

1. 名和久仁子（COE 研究員，国語国文学専修）  
「海音をめぐる俳人たち」
2. 北原博（COE 研究員，ドイツ語ドイツ文学専修）  
「大学都市イェーナと秘密結社」
3. 田畑雅英（本研究科教員，ドイツ語ドイツ文学専修）  
「なぜゴジラは都市を破壊するのか」

#### 第5回研究会

日時：2月28日（金）午後1時半～6時

場所：法学部棟11F 711C 教室

報告者・題目

1. 出口菜摘（COE 研究員，英語英米文学専修）  
「身体としての都市—T.S.Eliot: 'The Love Song of J.Alfred Prufrock' を読む—」
2. 竹下幸男（COE 研究員，英語英米文学専修）  
「風土と風刺—John Barth のメタフィクション—」

3. 山口久和（本研究科教員，中国語中国文学専修）  
「<都市をめぐる言説>あるいは<都市の言説>—中国近世の江南都市を中心として—」

以上

#### 資料

##### COE-C「都市の人間研究」チーム

在ヨーロッパ サブ・センター設置等にかかる交渉・会談について（高梨）

##### A. ロンドン大学 SOAS (School of Oriental and African Studies) Dr Drew Gerstle 教授との会談

(2002/11/24, 於ロンドン市内 Gerstle 教授宅, 担当：芝原, 金光, 高梨)

##### 1. サブセンターの設置に関して

ア) 学内：可能性薄

イ) 学外：可能

ア) の説明 (Gerstle 教授の回答)：

まだ大学 (SOAS) の会議に諮ったわけではないが、ロンドン大学内部の研究室を一室貸す可能性は低いとみられる。というのは、SOAS が近年来推進中の大規模な研究プロジェクトのために、学内の研究室が実質的に不足しているからである。もし貸すことができるとしても、貸借料が必要となる。もっとも、賃貸料規定を含めて正式な貸借規定がある訳ではない。ケースに応じて検討される。

また SOAS には二つの学生寮があるので、そこの一室 (もしくは数室) を1年単位で借り切るという方法も考えられる (電話, 学内 LAN コンセント, 共同シャワー, 共同キッチン付き)。ただし、学生寮はロンドン大学の学生に優先的に供与されるべきものであるため、市大のために融通してもらえるかどうかは保証の限りではない。

イ) の説明 (ロンドン市内の日本人向け不動産会社「Japan Homes」および「Tokyo-London Property」の話)：

治安がよく、ロンドン大学への交通アクセスがよい (地下鉄) 場所はロンドン市内のゾーン1 内西北地にある。このあたりの物件は、1LDK, 家具付き, 集中暖房・集中給湯タイプのもので、電気代・水道代などの諸経費込みで、月800～1000ポンド (約16万円～20万円) 程度 (ちなみにロンドンの物価は大阪の約2倍という説がある) から求められる。このほかに住民税 (ワンルームマンションの場合、60ポンド=12000円程度) が加算される。電話の敷設は不動産会社が代行する。その他、入居時に一月分の家賃に相当する補

償金が必要（契約終了時に受けるインヴェントリー・チェックによって補修，クリーニング等に必要と見込まれた額が差し引かれて返却される）。

ロンドンの物件は基本的に一年契約（半年契約，日割りもあるが，2倍以上の割り増しになる）。市大名義で借り，入居者が随時入れ替わるという形を取るようになる見込み。

家賃の支払いは基本的にキャッシュ払い（Japan Homes 宛）だが，日本の銀行口座からの送金や，トラベラーズ・チェックによる支払いも可。

## 2. 共同研究に関して

ア) 既定の「上方役者絵の研究」（大英博物館での展覧会を目標とする研究。その後，早稲田の演劇博物館，大阪市立博物館での展覧会を開催する予定）。

イ) ア)以外の共同研究の可能性…見込みあり。

ア) の説明（Gerstle 教授の談話）：

歌舞伎関係の，2005 年に大英博物館で展覧会を予定しているプロジェクトに関して言えば，たとえば浄瑠璃の場合は作品がテキストというかたちで残るのに対し，歌舞伎は基本的に舞台上のパフォーマンスであって，上演が終われば消えてしまう。今回のプロジェクトは，一つには，その歌舞伎を記憶にとどめるという意味も持つ。歌舞伎を中心とする遊芸関係の様々な日本文化について，イギリスが保持する作品群の穴を埋めるためにも，日本の協力を仰ぎたい。江戸時代の都市文化をめぐる英日間の共同研究ができれば面白いだろう。

また，歌舞伎から影響を受けた，刷り物，絵本に載っている俳諧，狂歌がたくさんあるが，そのような俳諧や狂歌のネットワークなどがどうであったのか，これを明らかにすることを今回の展覧会の目玉にしたい。それは享受者が創造的に参加する形の文化である。この方面のことは，従来あまり知られていなかったことであって，研究の意義は大きい。

イ) の説明（Gerstle 教授の談話）：

SOAS は数年前から大規模な研究プロジェクトを推進している。その中の一つ，「都市と文学」というテーマの主導者で，SOAS のメンバーである Stephen Dodd 氏との共同研究の可能性があるのでないか。氏は，大正期の日本文学の研究者だが，都市化に伴って都市と田舎とが乖離したことから生じる「ふるさと」の意味の変遷などをテーマとしている（なお，この会談の翌日，Gerstle 教授が Dodd 氏同席の会食の機会を設けてくださったので，氏から直接話を伺うことができた。

最近は文学における，比喩的な意味での「身体」，というテーマに関心をお持ちのようである。今後，芝原教授との間で，共同研究の具体化に向けての検討がなされる見通し。

## 3. 大学間協定の可能性

可能性はある。

説明（Gerstle 教授の談話）：

先般ファックスで取り交わした協定は市大文学研究科・文学部と SOAS 間のものである。ロンドン大学はそれぞれ独立した単科大学によって成り立っているため，ロンドン大学として協定を結ぶというのは意味がない。もっとも，ロンドン大と市大というレベルでの協定は可能である。

## 4. ロンドン大学 SOAS の学生の，市大での受け入れに関して

前向きな検討を要請する。

説明（Gerstle 教授の談話）：

ロンドン大学 SOAS の日本学科では，すべての学生を日本に留学させたいと考えている。京大，早稲田，慶應など，既に大学間協定を取り交わした日本の大学に受け入れを要請しているが，受入数はなお十分ではない。市大でも受け入れていただけるよう，是非取り計らっていただきたい。もし市大で受け入れてもらえるなら，年間 2 名程度の留学生（学部生）を考えている。

## 5. 正式な協定文書の取り交わしについて

既にファックスで取り交わしたもので十分。

説明（Gerstle 教授の談話）：

調印に関してはすでにファックスで正式なとりかわしをしたものと理解している。これまで多くの大学と同様の協定を結んできたが，いずれの場合もファックスで調印を取り交わしてきた。お互い忙しい身である以上，余計な手間のかかることはなるべく避けるべきだろう。

## 6. その他

来年度，日本への渡航を希望する。

説明（Gerstle 教授の談話）：

データベースの作成と，展覧会の実現に向けた具体的な詰めを行うために，日本に来年度行くことを考えているが，それは COE の予算の範囲で可能か？

## B. 社団法人ドイツ「恵光」日本文化センター (EKO-Haus der Japanischen Kultur e.V.)

青山所長他研究員との会談 (2002/11/27, 於  
デュッセルドルフ郊外の「恵光」日本文化セン  
ター, 担当: 金児, 阪口, 松村, 芝原, 金光, 高  
梨)

### 1. サブセンターの設置に関して

前向きに検討する。

説明 (青山センター長の回答):

去る6月1日に結ばれた市大との学術交流協定の延長線上にこの話があると了解している。前向きに検討したい。

本施設には、図書館の内部に Studienzimmer と呼ばれる部屋が3つあり、宿泊可能な研究室として利用できる。ただ、常時提供できるかどうかは確約できないし、恒常的にお貸しするのはなお難しいが、サブセンターを設置するという事なら、一応そこが使えるだろう。

また「恵光」ではドイツ国内の大学図書館の書籍と重ならない、仏教、古典文学関係の書籍を集めている。市大から研究者、COE 研究員が見えた場合、そのような資料を閲覧することができる。

また近隣の大学 (デュッセルドルフ、ボン、ケルン、ポッフム、デュースブルク、ミュンスター、ドルトムントなど) との連携も深いので、研究者が見えたとき、これらの大学への水先案内の役割を果たすことができるだろう。

### 2. 共同研究の可能性に関して

様々な可能性があり、前向きに対応。

説明

4名の専任研究員の専門が日本古典文学、仏教学、仏教文化、仏教文学、歌学、中国学などの領域にわたり、そこに市大文学研究科の教員との研究交流の可能性が認められる。恵光の専任研究員のうち1名は、来年9月の文学部創設50周年記念シンポジウムの講師として招かれる予定である。その他、共同調査の機会があれば、喜んで日本、または中国に赴くという意向が示された。4名の専任者以外にも、恵光に関わる研究者、奨学生がいるので、このような人たちも共同研究のメンバーになる可能性を持つ。

また「恵光」日本文化センターでは年2回、4月初めと9月初めに学術シンポジウムを開催している。通例、春には文化関係の、秋には仏教学、インド学、宗教学関係のテーマが取り上げられる。一度のシンポに約10名の

発表が予定されており、日本からは2名の発表者が招かれる。ドイツ語、さもなくば英語による発表に1時間、その後30~40分の討議の時間が与えられる。青山センター長からは、この学術シンポジウムの講師またはコメントイーターとして、市大から教員が参加されれば、一つの実質的な共同研究になり得るとの見方が示された。

市大からの提案にせよ、恵光からの提案にせよ、いずれの場合も積極的な相互協力態勢を取りたいという意向が確認された。

以上

### 注

1. 「<都市と人間>チームにおける研究計画」
2. 「都市文化研究センター関係図式」および「サブセンター構想について」(以上、サブセンター設置案を大阪市に説明に行った折りの持参資料) ならびに「ロンドン大学 SOAS とのこれまでのメールでのやりとり」
3. 「COE 研究員募集要項」および「研究活動計画書」・「履歴書・業績目録」のフォーマット。
4. A, B 両チームのこれまでの ML 上でのやりとりのコピー。
5. ロンドン大、恵光での会談の詳細に関しては、資料「在ヨーロッパ サブ・センター設置等にかかる交渉・会談について」を参照。

## ロンドン・サブセンターについて

芝原 宏治

### ○ロンドン・サブセンターについて

ロンドン・サブセンターは、学術交流協定を結ぶロンドン大学 SOAS と連携して本学文学研究科が都市文化創造のための人文学的研究を推進するイギリスの拠点として、平成15年2月22日に、市の中心部に近い下記の地に開設された。

27 Lords View, St John's Wood Road, London  
NW8 7HL

ここは、いわゆる高級住宅街の一角にあって、治安がよく、ベイカーストリート駅で地下鉄に乗れば、乗り換えなしでロンドン大学へ通えるほど便利な場所である。(ただし、最寄りの地下鉄駅はセント・ジョンズウッド。) 近くのリージェンツ・パークには有名なオープン・エア・シアターがあるので、気候のよい時期には徒歩圏内で本格

的な芝居を見ることもできる。

サブセンターには研究室と寝室があり、開設された日に入居した英文教室の杉井助教授は、短い時間を有効に使って研究条件および生活条件を整えた。2月には国文教室の金光講師が入居し、さらに研究条件を整えたいと、ここを拠点にしてイギリスでの研究を行う予定である。

サブセンター開設にあたっては、SOASのガーストル教授から有益な助言をいただいた。ロンドン大学の中に研究スペースを確保したいという市立大学側の希望も、同教授を通してしかるべき筋に伝えられるはずである。希望がかなうなら、ロンドンのサブセンターはハンブルクのそれにほぼ匹敵するものになるであろう。

文学研究科とSOASとの学術交流協定は平成14年に締結されたものだが、阪口文学研究科長とガーストル教授との親交は数年前からある。また、ガーストル教授の師であるドナルド・キーン氏は昭和30年代に国文教室で行われた近松門左衛門の輪読会に出席している。協定締結の際に連絡役を務めた金光講師がガーストル教授の研究方法を間近に学んだことがあることも付記しておきたい。

#### ○ロンドン大学との学術交流の経過および予定

平成14年7月 大阪市立大学文学研究科とロンドン大学SOASとの間で学術交流協定が締結される。

平成14年11月23日～26日 高梨助教授、金光講師、および芝原の3名がロンドン大学を訪問。SOASとの学術交流についてガーストル教授およびドッド博士と意見を交換する。

平成15年2月1日～2月28日 杉井助教授ロンドン大学訪問。SOASとの学術交流についてガーストル教授およびドッド博士とさらに詳しく意見を交換するかたわら、ロンドン・サブセンター設置に向けて活動を行う。

平成15年2月16日～2月22日 芝原、ロンドン大学を訪問。SOASと連携したワークショップの開催およびロンドン大学学生の受け入れなどについてドッド博士およびガーストル教授と面談する。また、杉井助教授とともにロンドン・サブセンターの候補物件を下見して適切なものを選び、持ち主との交渉に入る。

平成15年2月22日 ロンドンサブセンター開設。杉井助教授入居。

平成15年3月9日 金光講師ロンドンへ出発し、サブセンターに入居する予定。

平成15年4月7日 阪口教授、塚田助教授、金光講師の3名がロンドン大学SOASの研究者と協同してロンドン大学で国際シンポジウムを開く予定。

平成15年7月 ガーストル教授来日し、大阪市立大学文学部の「インターナショナルスクール」

で講義する予定。

平成15年9月 阪口教授をはじめとする本学文学研究科の研究者がガーストル教授と協同して国際シンポジウムを行う予定。

平成15年10月1日～2日 SOASのドッド博士（およびハンブルク大学の研究者）を招いて大阪市立大学で「都市とフィクション」にかかわるワークショップを開く予定。

## ハンブルクサブセンターについて

阪口 弘之

#### ○ハンブルク大学サブセンターについて

大阪市立大学は、ドイツのハンブルク大学と下記のように長い学術交流を積み重ねてきた。現在も、文学研究科と同大学との間で「大阪市立大学プロジェクト研究」として「大阪市とハンブルク市をめぐる都市・市民・文化・大学」の共同研究を継続中である。

ハンブルク大学サブセンターは、この研究を発展的に展開する拠点として、平成14年11月27日に、同大学日本学教室及びゲストハウス内に設置された。本学名誉博士ローラント・シュナイダー教授をはじめとするハンブルク大学関係者の格別のご好意に拠るところであり、篤く感謝申し上げたい。既に高梨助教授、大澤教授、仁木助教授が現地赴任、積極的に研究活動を展開中である。

なお、ドイツではもう一ヶ所、デュッセルドルフ市のドイツ「恵光」文化センターとも学術交流協定を締結している。これはハンブルク大学サブセンターとの連繫を視野に入れたもので、4月には村田教授が「恵光」主催の学会に招かれている。研究者のみの交流となるが、ハンブルク大学と共に、日独共同の日本文化研究の柱となろう。

#### ○ハンブルク大学との学術交流経過

平成元年5月11日 大阪市とハンブルク市が友好都市提携。

平成元年8月～9月 大阪市会調査団がハンブルク市を訪問。ハンブルク大学のシュナイダー教授から市大との交流について希望の表明があった。

平成元年11月14日 大阪市立大学長からハンブルク大学長へ学術交流の実施を提案。

平成2年5月30日 ハンブルク大学から現時点では予算上の制約により協定締結はできないが、相互に研究者の交流を行いたい旨提案。

平成3年2月9日～3月5日 ハンブルク大学日本学教室シュナイダー教授を本学（文学部国文・独文科）に受入れ。

平成3年4月25日～7月24日 本学文学部国

文科阪口弘之をハンブルク大学（東洋学部日本文学教室）に派遣。

平成3年9月30日 ハンブルク大学日本文学教室シュナイダー教授が本学を訪問。

平成3年11月7日～11月15日 ハンブルク大学東洋学部長ユッタ・ラル・ニュー女史の受入れ。

平成3年11月26日 ハンブルク大学評議会で交流協定が承認され、ハンブルク大学長が署名。

平成4年1月20日 ハンブルク大学との学術交流協定を本学評議会で承認し、発効。

平成4年4月20日～8月25日 本学文学部河音能平教授をハンブルク大学に派遣。本交流が始まる。

平成5年6月27日～6月30日 大阪市立大学代表団（学長ほか2名）の派遣。

平成6年3月5日～3月9日 ハンブルク大学代表団（学長ほか1名）の受入れ。平成11年にも（3名）。

平成7年2月21日～3月28日 本学文学部宮坂豊夫教授を派遣。

平成8年10月 本学学生国際交流規程に基づくハンブルク大学との学生交流開始。

平成9年5月 本学評議会でシュナイダー博士への名誉学位の称号授与を承認。

平成11年9月 ハンブルクと大阪姉妹都市10周年記念行事で阪口が基調講演。

平成11年9月16日～10月15日 本学文学部豊田ひさき教授を派遣。

平成13年5月 本学文学部金児暁嗣教授を派遣。ハンブルク大学総長らと大学改革問題等で意見交換。

平成13年11月8日 シュナイダー博士、本学を表敬訪問。

平成14年11月27日～12月1日 金児、芝原、松村教授、高梨助教授、金光講師、阪口の6名がデュッセルドルフ市のドイツ「恵光」文化センター及びハンブルク大学を訪問。「恵光」との学術交流について意見交換。ハンブルク大学でサブセンターを設置。シュナイダー教授の英断によるところ大きい。

平成14年12月 高梨助教授をハンブルクサブセンターに派遣。大澤教授、仁木助教授が続く。

## バンコクサブセンター整備状況について

山野 正彦

バンコクサブセンターはタイ王国の首都、736万の人口を擁するバンコク市の中心部に立地し、交通至便なチュラロンコン大学の広大な敷地の中、文芸学部・芸術学部の入る新しい15階建て

学舎の14階の一室（1419号室）を占めている。部屋の入り口に英語の新調プレート掲げて、平成15年2月1日付で開設された。このサブセンターの設置については、文学研究科と学術交流協定を結んだチュラロンコン大学芸術学部側の全面的な協力があつた。とくにこの交流協定の締結に携わつたBチームの中川眞教授とチュラロンコン大学芸術学部長チャナロン教授、ブッサコーン助教授の間のこれまでの友好関係から大きな恩恵を受けた。チュラロンコン大学側との協議の結果、この部屋は賃貸料ではなく管理費を支払うことで使用できるようになった。サブセンター運営を含めた両大学間の共同研究全体にかかる運営委員会を早期に設置する計画である。

サブセンターの設置のために、中川、山野が平成14年12月に、中川、橋爪が平成15年1月に、山野が平成15年3月に現地に赴き、開設のための交渉と契約等の事務、備品の購入、事務補助員の雇用等にあたつた。また多和田が15年1月末の出張時に備品整備にあたつた。

オフィスは面積約20m<sup>2</sup>、冷房完備、学内LAN配線が既設された研究室フロアにある。備品としては電話機（国際電話可能）、机、いす、書架、整理棚、パーソナルコンピューター一式、ビデオモニター、マルチビデオコーダー、ビデオカメラ、CDコンボなどがこれまでに整備されている。



現地雇用の事務補助員は英字紙の『バンコクポスト』に募集広告を載せ、7名の応募者から面接した結果、Sudkanung Ittivechさんに決定した。彼女はJALその他の日系企業で働いた経歴を持ち、堪能な英語能力と初級程度の日本語能力を有し、PC操作にも習熟している。3月1日からオフィスに勤務して、部屋の整備、資料収集・整理等に従事している。バンコクに駐在する教員、COE研究員の有能な研究補助員としての活躍を期待している。

バンコクではサブセンター開設を記念して平成15年4月8日に国際フォーラムを開催する予定である。またこのフォーラムの英文報告書も15年度中にタイで刊行される予定である。その後も毎年1回のシンポジウム開催と報告書を出版する計画である。15年度後期には「都市環境モノグラフ」調査、「市民の生活様式の価値観の特徴」調査などが予定されていて、サブセンターの機能はフ

ル回転することになる。

バンコクはアジアの航空交通の拠点都市であり、中国、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、シンガポール、マレーシア、インドネシア、インド、ネパール、スリランカ等への直通フライトが就航していてアジアの都市研究の拠点として絶好の位置にある。バンコクサブセンターはこの地の利を生かして、大阪市大を中心とした研究交流ネットワークの要として今後重要な役割りを果たすことが期待される。

## ジョクジャカルタ・サブセンターの立ち上げについて

中川 眞

ジョクジャカルタはインドネシアの中部ジャワの、やや内陸部に位置する古都だ。とはいっても、ジョクジャカルタに都が設営されたのが1755年であるから、そんなに古いわけではない。ただ、ジョクジャカルタの前には近隣のコタグデに都があったらから、この地域はジャワの政治的センターにふさわしい場所の力をもっていたのだろう。その理由のひとつに秀峰メラピ山の存在がある。2000メートルを遙かに越すその山塊の頂から、今日も白煙が立ちのぼっており、いかにも神々しい。その山から流れ出る豊富な水を源として、豊かな作物の稔りが保証されている。山からはなだらかに傾斜が続き、やがて大地はインド洋に呑み込まれる。その中間域にジョクジャカルタという都が配置された。山と海というコスモロジカルな空間的セッティングが計算に入っていたことは明らかだ。

王宮があるということは政治と文化の中心であることを意味する。そしてインドネシア共和国が1948年に独立し、首都がジャカルタに移されてからものち、誇り高きジョクジャカルタの人々は、文化のポテンシャルティだけは更に高め続けた。人口は50万人という中都市ながら、多くの文化遺跡、施設、大学を保有する、インドネシア屈指の文教・観光都市として名を馳せている。なかでも、国立ガジャマダ大学、ならびに国立インドネシア芸術大学は、それぞれ総合大学あるいは芸術大学としてインドネシアで第1位にランクされており、大阪市大文学研究科は2002年に、このガジャマダ大学の文化科学部そして芸術大学と国際学術交流協定を結んだのである。

交流拠点としてのサブセンターは、2校と共同研究を行うという状況に照らし合わせて、いずれかの大学のキャンパスに設置するのは不都合が生じると判断し、私たちは大学の外に場所を求めた。

そこで浮上してきたのが、王宮南壁に近いゲストハウス「ウィスマ・アリーズ」の1室である。場所が両大学の間にあること、閑静な住宅地にあること、ゲストハウスの出資者が日本人であり、私たちの事業に対する深い理解と意志疎通の簡便さがあることなどから、私たちは迷わずオーナーと交渉し、2階建て建物の最も明るい18号室にその場を得た。

広さは約20平方メートル、作業のための家具(机、椅子など)、モニターテレビ、AV録再機、電話、冷蔵庫、本棚などを設置した本格的な事務所兼研究室に改装され、2003年1月より供用を開始した。現地の研究者から大きな期待を浴びて胎動を始めたところだ。

## 上海サブセンター

栄原 永遠男

大阪市と上海市とは、1974年に友好都市・姉妹都市、1995年にビジネスパートナー都市として提携し、1981年には、大阪港と上海港とが友好港の関係を取り結んでいる。これをふまえて、大阪市立大学と上海市の大学とは、これまで長期にわたって学術交流を積み重ねてきた。これらを前提として、文学部・文学研究科は、2002年4月1日付で華東師範大学の5学院と、以下のような学術交流協定を結んだ。さらに、同年10月15日には、両大学間の学術交流協定が締結されている。

大阪市立大学文学部・大阪市立大学大学院文学研究科と華東師範大学人文学院・法政学院・教育科学学院・資源及び環境学院・外国語学院との学術交流協定

大阪市立大学文学部・大阪市立大学大学院文学研究科と華東師範大学人文学院・法政学院・教育科学学院・資源及び環境学院・外国語学院とは、それぞれの部局における教育及び学術研究上の協力関係を推進するため、ここに学術交流協定を締結することに合意する。

第1条 大阪市立大学文学部・大阪市立大学大学院文学研究科と華東師範大学人文学院・法政学院・教育科学学院・資源及び環境学院・外国語学院とは、それぞれの部局における教育及び学術研究を推進するため、下記の活動において協力する。

1 共同研究、講義、シンポジウム等の

実施とこれに伴う研究者の交流

2 両大学のそれぞれの部局がともに関心を有する分野における情報及び資料の交換

3 主として大学院博士課程学生の交流

第2条 この協定に基づく交流を実施する際に必要な事項については、その都度両大学のそれぞれの部局間で意見交換を行い、調整するものとする。

第3条 本協定は、本協定署名完了の日に効力を生ずるものとする。また、一方の部局は、文書による6ヶ月前の他方の部局への通知により、本協定を終了することができる。

第4条 本協定は中国語及び日本語により作成する。

大阪市立大学文学部長  
大阪市立大学大学院文学研究科長  
阪口弘之

2002年4月1日

華東師範大学人文学院院长 王斯德  
華東師範大学法政学院院长 範軍  
華東師範大学教育科学学院院长 丁綱  
華東師範大学資源及び環境科学学院院长 曾剛  
華東師範大学外国语学院院长 陸留弟

2002年4月1日

この協定にもとづいて、COEとして両大学間の共同研究を推進するため、2002年12月、2003年1月に関係者を派遣するなどして交渉を積み重ねた。この過程では、大阪市上海事務所の協力を得ることができた。その結果、華東師範大学の田家炳教育書院内の2室にサブセンターをおくことができた。

2003年1月14日にサブセンターの開所式を行った。これには、大阪市立大学側からは金児曉嗣副学長・榮原永遠男都市文化研究センター副所長その他が出席し、華東師範大学側から、羅国振副学長・王斯德人文学院院长・範軍法政学院院长・曾剛資源及び環境科学学院院长その他が出席した。同日午後には、第1回研究会を開き、両大学から2名ずつ研究発表を行った。開所式ならびに研究会の内容は、ニューズレターとして公表する。

また、華東師範大学側に大阪市立大学教員や大学院生の長期滞在の受け入れ態勢を整えてもらうように交渉した。それにもとづき、1月下旬から3月下旬まで、文学研究科教員がこのサブセンターに常駐して、器材の整備、インターネットなどの研究教育環境の整備を進めた。

さらに2003年3月には、2003年度に実施す

る予定の共同調査研究事業ならびに国際シンポジウム開催の準備のため、関係者が華東師範大学ならびに上海市を訪問した。その際、第2回研究会を開催した。この模様もニューズレター第2号に掲載する予定である。

## ホームページ委員会

水内 俊雄

ホームページ委員会という名称ではあるが、実際には都市文化研究センター所員内のメール管理や、ホームページにアップする、センター研究員のアウトプット、文書、画像、マイクロフィルム、地図などの電子化、データベース化をその業務としている。5人の教員スタッフと、後方支援スタッフ4人の計9人で業務を行っている。日常のメンテナンスやサービス、あるいは新規のファイル構築などは、ほとんどがSOHO形式で後方支援スタッフの業務となっている。

都市文化研究センターの開設と同時にホームページを開設し、8つのメーリングリストの管理も行っている。またE-mailによる問い合わせを受け付けるとともに、インターネットを通して研究員の募集や、都市文化研究センターにおける様々な情報を掲載している。詳しくは<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/>をごらんいただければ幸いである。

常に最新情報をリアルタイムで掲載していくことをモットーにしているが、都市文化研究センター活動の全容がなかなかつかみがい時期がしばらく続き、また海外のサブセンターも徐々に整備される状況であったこと、また研究会やシンポジウムの開催の大まかな全体像がようやく固まってきた状況にあり、ホームページの構成は、再度構築しなおす予定である。

都市文化研究センターの活動をIT面でより円滑にバックアップするため、専用サーバを導入することになり、現在運用の試行期間となっているが、まもなく本格稼働する予定である。このサーバの導入により、最新のIT技術を活用した研究活動を提案、推進してゆくことが可能となる。また独自の、あるいは貴重な研究成果、データベースをダイナミックに研究成果を公表していくための環境を整備するために、GISデータをはじめとした、各種資料のデータベース化、それを公開していくことをめざしている。

GISデータの地図化については、ホームページ委員会のもとで、専門家を招聘し、研究会を早速開催している。この類のデータベースの構築については、都市のさまざまな社会経済指標の町丁別

の地図化、およびその公開を手始めに、歴史資料のマイクロフィルムの電子化や、絵図、地図の画像取り込みなどを行う予定である。また同時に、叢書や雑誌、各サブセンターでの報告書やニューズレターなど、すべての出版物も pdf 化して掲載し、web 上で閲覧可能にする。また今後は、英語版をはじめ各種言語への対応も予定している。そして関係学術機関へのリンクを充実させ、インターネット上において都市文化研究の中心となるようなサイト作りをめざしている。

## 文学研究科叢書編集委員会

井上 浩一

### 1) 委員会設置の経過

COE 研究拠点「都市文化研究センター」の設立と相前後して、文学研究科においては「アジア都市文化学専攻開設記念シンポジウム」「文学部・文学研究科創立 50 周年記念事業」などが行われている。「都市文化研究センター」の研究成果を中心に、これらの事業も含めて、文学研究科の研究・教育の成果を、学界はもちろん社会に広く伝えることをめざして、文学研究科叢書を刊行することになった。叢書の刊行事業を遂行するため、平成 14 年 11 月 1 日に文学研究科内に叢書編集委員会が設置された。

### 2) 平成 14 年度委員（教室・年齢順）

小林道夫（哲学）、広川禎秀（歴史学）、井上浩一（歴史学、委員長）、岸本直文（歴史学）、小林直樹（国語国文学）、三浦國雄（アジア都市文化学）、橋爪紳也（アジア都市文化学）

### 3) 14 年度の主な活動

本年度の委員会は、文学研究科叢書の第 1 巻として、平成 14 年 9 月 27 日～29 日に行なわれたアジア都市文化学専攻開設記念国際シンポジウム（第 10 回大阪市立大学国際学術シンポジウム）の成果をまとめた『アジア都市文化学の可能性』を刊行するとともに、文学研究科叢書の刊行方針、今後のあり方の検討を行なった。なお、『アジア都市文化学の可能性』の編集は、主として橋爪委員が担当した。

### 4) 活動記録（平成 15 年 2 月 7 日現在）

※センター会議等上部委員会への報告、電話・メールでの連絡・相談等は除く。

11 月 1 日 第 1 回委員会  
議題 1 委員長の選出

井上（浩）を委員長に選出した

- 11 月 15 日 第 2 回委員会  
議題 1 文学研究科叢書の基本理念・全体計画の検討（継続審議）  
議題 2 叢書第 1 巻『アジア都市文化学の可能性』の編集状況の報告  
議題 3 2003 年度刊行計画の検討（継続審議）
- 11 月 16 日 清文堂との打ち合わせ（橋爪委員）  
11 月 26 日 清文堂より編集関連の提案・通知  
12 月 6 日 第 3 回委員会  
議題 1 叢書の装丁等につき清文堂からの提案を検討  
議題 2 叢書第 1 巻の編集状況の報告  
議題 3 2003 年度刊行計画の検討  
1) 文学部創立 50 周年記念国際シンポジウム・連続講演会の成果をまとめる  
2) COE の研究成果、若手研究員の成果（課程博士論文等）の刊行につとめる
- 12 月 10 日 清文堂との打ち合わせ（井上委員）  
12 月 18 日 装丁案作成資料（含『刊行の辞（案）』）を清文堂に送付
- 1 月 8 日 清文堂との打ち合わせ（橋爪委員、井上委員）  
1 月 8 日 第 1 巻『アジア都市文化学の可能性』第 1 次入稿（橋爪委員）  
1 月 10 日 第 4 回委員会  
議題 1 叢書第 1 巻の編集  
議題 2 叢書インターナショナル版について清文堂版とはスタイル・通し番号は別とする  
議題 3 文学研究科叢書委員会内規の検討（継続審議）  
議題 4 研究科叢書（清文堂版）の装丁案確認背表紙を統一する（文学研究科叢書、巻数、書名、著編者名）
- 1 月 18 日 第 1 巻『アジア都市文化学の可能性』第 2 次入稿（橋爪委員）  
2 月 7 日 第 5 回委員会  
議題 1 叢書第 1 巻の編集。構成案の確認  
議題 2 叢書委員会内規（案）の検討（継続審議）

## 『都市文化研究』編集委員会

仁木 宏

### 1) 委員会設置の経過

COE 研究拠点「都市文化研究センター」の申請段階より、同センターにおける研究成果をまとめ、対外的に広く発信するために、『都市文化研究』の発刊が予定されていた。

センター設立後、所属教室の構成に留意しつつ、文学研究科の若手教員を中心に編集委員が選ばれ、平成14年11月1日、文学研究科内に、『都市文化研究』編集委員会が設置された。

2) 平成14年度委員

土屋貴志(哲学)、仁木宏(歴史学、委員長)、木原俊行(教育学)、山崎孝史(地理学)、イアン・リチャーズ(英米言語文化)、田中一彦(言語情報学)

3) 平成14年度の主な活動

本年度は、『都市文化研究』1号の発刊に向けて、(1)論文・ニュースなど誌面の構成、(2)雑誌の体裁、表紙の装丁、(3)原稿の公募、執筆依頼と査読、編集、(4)印刷会社・イラストレーターを選定、やりとり、(5)雑誌の配布先の検討、(6)編集アルバイトの選定などをおこなった。

実際に集まって開催する編集委員会とは別に、ML(メーリング・リスト)上で事務連絡、意見交換を積極的におこなった。

4) 活動記録(平成15年2月7日現在)

11月1日 準備委員会

- (1) 編集委員の招集
- (2) 編集委員長を選出(仁木)

11月13日 第1回編集委員会

- (1) 『都市文化研究』1号の内容
- (2) 論文募集の方法

(依頼分・公募分)

- (3) 予算、発行部数など
- (4) 使用言語
- (5) 刊行までのスケジュール

11月15日 論文・研究ノート公募開始~HP、掲示、教室代表に配布(11/30締切)

11月26日 論文・研究ノート(依頼分)執筆者推薦依頼(12/13締切)

12月17日 第2回編集委員会

- (1) 1号の内容確認
- (2) 公募論文(申し出10本)のあつかい(→全員執筆の上、再審査)
- (3) 執筆者の所属・身分

1月5日 原稿(論文・ニュース類、依頼分)依頼

1月31日 公募論文締切(投稿6本)

2月3日 原稿(論文・ニュース類、依頼分)締切

2月7日 第3回編集委員会

- (1) 公募論文の採否決定(採用4本)
- (2) 刊行スケジュールの確認
- (3) 田中委員退任にともなう後任委員の人選

付記:2月23日、岩本真理(中国語中国文学)が新委員となった。